

家庭生活において居心地の良さを感じる要因 — 大学生を対象とした自由記述法を用いて —

Where can we find our places at home?

甲村和三[†], 飯田沙依亜^{††}
Kazumi Kohmura, Saea Iida

Abstract When we go into a new environment, it impose both change and challenge. While most people can turn it into opportunity, some people are crushed with anxiety or loneliness. In this study, we asked college students to describe the factors contributing to their comfort at home. The comfort at home should effects on the comfort at college. Based on results, we discuss how we can support the efforts made by college students to adjust to college life.

1. はじめに

「居場所」とは、人のいる空間的な意味での場所である。それを心の拠り所、あるいは占有感の感じられる場所、存在を実感できる場所、といった心理の意味で、「相応しいところに、自分らしくいられるという実感」をここでは「居場所感」と称することにする。「居場所感」は日常的概念の印象が強いが、既往研究も既にいくつか認められることから、本研究でもこのような定義を持つ構成概念として用いることにする。

人はさまざまな場面において自信を持って行動し、水を得た魚のように動き回ることがある一方で、ときにその場面に居心地の悪さを感じ、自分という存在そのものがその場に相応しくないように感じたり、逃げ出したいなったりもする。こうした場所や場面に対する否定的感情は、時には日常生活空間においてすら感じることもある。例えば、周囲の雰囲気になじめなかったり、たまたま会話の流れにうまく乗れなかったりするようなとき、こうした感情を強く経験する人も多いであろう。

このような否定的感情、すなわち本稿でいう居場所感のなさは、置かれた状況とその状況における個人の受容度との関係で不整合を感じている状況と考えられる。こうした状況でも人生経験が豊かな人は、しばらくは耐え

たり、他事に勤しむことで違和感を紛らわせるなど、乗り越える術を心得ているものである。しかし、経験や耐性が不足する若齢者たちには、なかなか思うようにはいかない。その結果、その場所（場面）から逃げ出した感情が募ることになる。その場に留まらざるを得なければかなりの不快感情と葛藤することになるし、状況が長引けば不適応を思わせる行動が出現することも考えられる。このような居場所感のなさに関わりを持つ若齢者（中学生や高校生・大学生など）を対象とするいくつかの調査が、既に試みられている（例えば、杉本・庄司, 2006、斎藤, 2007、石本, 2008、糸原・社浦, 2011 など）。

本研究は、これらの既往研究を参考にしながら、大学生のキャンパスライフへの適応をどのようにサポートしていくべきかを探索的に検討することを目的としている。多感な青年期は多くの経験を経て、そしていくつもの危機を乗り越えて自我を確立していく大切な時期でもある。メンタルヘルスの領域でも、自分の存在を実感できるということは自分の居場所を見つけたということであり、向後の活躍の心的拠点を得たということでもある。全ての青年がそのような居場所感を確立できれば申し分ないが、状況的に、そして性格的になかなかそれを見つけれない人もいる。本研究の対象者である大学生も、身は大人でも、心は相変わらず未成熟ということも少なくない。特に、入学時点で不適応を起こす学生が少なからずいるのが現実である。大学に入学すれば親は全ての責務が終わったかのように子から離れることが多いが、当の

[†] 愛知工業大学 基礎教育センター（豊田市）

^{††} 名古屋大学大学院環境学研究科（名古屋市）

学生たちはあまりにも高校時代までの生活と異なることに少なからぬショックを感じたりもしている。まだまだ親の援助が必要である。大学キャンパスは高校までとは比較にならない広さを誇り、講義を受講するにしてもその都度教室を変え、併せて席周辺の仲間の顔ぶれが変わる。生活全般を見ても、自分で判断し、個としての自立行動が求められる。高校時代までと異なり、友だちに頼る、頼られる共存的・協同的行動は減る。大学では自由が増える代わりに、自己責任の行動が余儀なくされる。クラブやサークル活動も、高校時代のどちらかといえば仲良しクラブ的人間関係から、時にプロを目指す本格的な活動をする部員も多く、高校時代には一流と思っていた技倆も大学のクラブでは並の技倆と化し、自信を喪失し、屈辱の状況に追い込まれたりもする。

こうした大学生活に早く慣れ、自分の居場所を大学に確保し、適度な自己主張と妥協を覚えながら互いを認め合う人間関係を形成しないと、孤独感に苛まれる。

先の調査研究(飯田・甲村ら、2011)では、新入の大学生たちが新たな大学生活にどのように適応し、いつ頃彼らなりの居場所感を確立するか、また居場所感のなさを感じたときに、どのような方略を持ってそれを乗り越えようとするか等々について、評定法を用いて検討した。主な結果は次のようなものであった。

①対象者のほぼ半数が過去に「居場所感のなさ」を経験していた。

②キャンパスライフに対しては入学後ほぼ1ヶ月で約80%の学生が慣れたと回答した。しかし残る約20%の学生の慣れの速度は鈍いようである。

③性格や行動の特徴と居場所感形成との関係では、「神経質」「短気」「自己中心的」傾向が強いとする学生が、そうではない学生に比して居場所感のなさを感じやすいことが認められた。

④「高校時代の同窓会に参加したが周りは未知の人ばかり」(事例A)、「友だちと遊びに行く計画を立てたが自分の提案は無視された」(事例B)という2つの設定場面で、その時の感情や対処的行動等を尋ねた。その結果、居場所感のなさは事例Aで顕著であった。これは、いわば既知の人間関係の中で無視されるよりも、未知の人間関係の中に居る方が居場所感のなさが強いことが示唆された。また、対処行動としては「我慢した」「深呼吸を繰り返した」などが多く挙げられており、事例Bでは「皆同じ状況だと言い聞かせた」なども挙げられた。

⑤居場所感のなさは不要・孤独・違和感などにより構成されていた。

これらはわれわれが用意した質問項目に対する評定法を中心とするデータに基づき多変量解析を試み、数量的

に一般的傾向を探るためのものであった。しかし、「居場所感」は、もともと個人の感情である。われわれがあらかじめ準備した一般的な尺度で明らかに出来た部分がある一方で、個別的な(個人的な)感情面まで顕示するのは難しい。そこで次には、回答者が自分の言葉で表現できるいわゆる自由記述法により、改めて「大学生生活の適応(居場所感がある)」を感じる心理的要因(どのような状況にあるとき、居場所を感じるか)について調べてみた。前報(甲村・飯田、2012)では、先ずキャンパスライフにおける居場所感について自由記述法により個別的な適応条件を調べた。記述された事項すべてについて、「ヒト」「モノ」「コト」という3群に内容分類をおこなって検討した。それによれば、「ヒト」に関する記述例が圧倒的に多く、当然のことながら「友人関係」に関する内容、例えば、一緒に食事をする・話す・授業を受ける・遊ぶなどの記載や、友だちに頼られる・友だちを頼る(困ったときにフォローしてくれる)などの記述が圧倒的に多かった。要するに快適なキャンパスライフの基本は大学内で作る友人関係が最も基本になっているということである。大学生生活への適応感の獲得に9割ほどの学生が入学後1ヶ月ほど要したという回答が多かったが、まさに知人・友人の形成に必要なとする期間と符合しているように思われる。同じ「ヒト」要因でも、教職員との関わりは快適なキャンパスライフ形成の内容としての記載頻度は6.55%であり、規定要因項目群としてはやや消極的なものであった。「モノ」の項目群では場所、具体的には教室・学生のたまり場・黒板・机や椅子などを記載した頻度は約5%であり、「コト」、具体的には日常的挨拶・部活への参加・大学祭への参加などの内容記載は約21%であり、コトを通じたヒト(特に友人)との関わりからみてキャンパスライフへの適応感(居場所感)形成においてはやや強い影響力が認められた。

次に、本論文では同じく自由記述法による「家庭での居場所感」について尋ねた結果をまとめることにした。教員として教室で接する限りほとんどの学生がキャンパスライフを謳歌しているように見えるが、学生相談の経験の中では、しばしば学生たちは家庭での悩みを吐露する。家族の一員として20年近く一緒に暮らしているはずであるが、親子・兄弟(姉妹)の関係が希薄化していることを訴える学生も増えてきている。高校までと異なり、あれやこれや口出しされる(干渉される)ことが減った代わりに、勝手にしたら(放任されている)という雰囲気が増えてきたと言う。家・家庭の中での居心地が以前とかなり異なってきているように感じるという。相談に訪れる学生の言葉であるから例数としては多いわけではないが、学生たちの「家」での居場所感の実態を明らか

にしておくことも学生たちのキャンパスライフの基盤を考える上で重要となろう。なお、本調査は先の大学生活への適応を調べたときに併せて実施したものである。

2. 方法

2・1 質問紙

「家庭での居場所を感じる心理的要因（どういう状況にあるとき、家で自分の居場所を感じるか）について思いつく限り箇条書きして下さい」と記した質問紙を用いた。自由記述法を用いたため一人で多数の回答をした者もいれば、わずかな回答の者もいる。無記入あるいは意味不明の回答は無効と見なした。

2・2 回答者

1～4年次の男女大学生（有効回答者 294人）。講義科目の関係で回答者は1, 2年生が大半である。

2・3 調査実施時期

平成23年10～11月 講義終了後の時間を利用して実施した。

3. 結果

3・1 結果の整理

箇条書きされた項目数は回答者によりバラバラである。白紙、意味不明の回答を除き、項目数の多寡にかかわらずすべてデータとして採択した。書き込まれた多数の項目をその関連性からいくつかのカテゴリーに便宜的に分類した。表1は分類されたカテゴリー（項目群のまとめ）、とそれに含まれる具体的記述項目、その項目を記述した回答者の延べ人数（例数）、全回答項目数632に対する当該カテゴリーに属する項目数の出現頻度（%）を示している。なお、表のカテゴリーは出現頻度順に並べて示した。1人だけが記述した項目は表中に示していない。

3・2 分類されたカテゴリーと項目群の解釈

これによれば、分類されたカテゴリーとしては、「安心の場所認識」「自分だけの部屋（個室認識）」「家族間交流（食事場面）」「家族との関わり（自分の定位置がある）」「家庭内での役割が与えられている」「見慣れた場所・生育場所の認識」「家族との日常的挨拶」「家族の中の暮らし」「家族間交流（家族との会話）」「家族の中の暮らし（入浴場面）」「家族との信頼関係（絆）」「ペットがいる」「その他」である。

「安心の場所認識」は、文字通りホッと出来る場所と

しての空間認識である。そこでは、他人とは遮断された空間で家族と暮らしているという認識空間であり、無許可では他人が介入することのない空間だという安心感が窺える。まさに家族成員に共有の専有空間という認識である。テリトリーと表現してもよいであろう。リビングルームのような家庭内でのパブリックスペースでの家族間交流の様子を項目内容から窺い知ることができる。

「自分だけの部屋（個室認識）」は、家という他人の介入から外れた家屋の中の、しかも家族からも分離されたいわば二重に保護された安心の空間である。そこでは自分の物に囲まれて全く自由にくつろげるといった空間認識が窺える。

「家族間交流（食事場面）」は、これもいわば安心の場所認識と言えようが、食事という比較的限定された場面を想定した記述項目群である。食事は多くは食堂（食事室）や台所で行われる。しかも多くの家庭では、家族が揃って食事するという形態が一般的であろう。食事という共同的な生活行為が団欒という家族間の交流（親睦）を図っていると言える。回答者たちが家庭内での家族や自分の日常を連想するもっとも具体的光景と言えよう。

「家族との関わり（自分の定位置がある）」は、家屋内で自分の定位置があることであり、長年の居住慣習で定位置化された占有位置が回答者に認識されている。居間や食堂といった家族が集うパブリックスペースにおいて自分がいつも座る位置が暗黙の了解のもとで保証されているということは家族内成員としての自分を認識するには恰好の情景であろう。「家族の中での暮らし（入浴場面）」「家族との信頼関係」の項目カテゴリーも、場面こそ異なるものの大まかには同一カテゴリーと考えてよいであろう。

「家庭内で役割が与えられている」では、手伝いとか、家事の分担、家族に頼りにされている、家族からの相談に乗る、などの項目が含まれる。項目数としてはそれほど多いわけではないが、自分がそこに居る必然性を実感出来る事柄である。居場所感のなさは、われわれのこれまでの研究においても、その場に居ることが相応しくない、場違い、不要な自己存在感といった回答が多かったが、自分がやらなければならない分担的な役割や仕事・任務があれば、まさに自分の分担的役割遂行を通じて自分の必要性を自覚するには恰好の活動である。しかも、その分担的活動を終えた後に、家族から「ご苦労様」とか「やっぱりあんたが居なければ困る」とかの声をかけられれば最高の居場所感を得ているということであろう。

「見慣れた場所・生育場所の認識」は、まさにわが家という認識のことである。自分が・家族が占有出来る空間として幼いときから付与され、私有してきた空間（場

表 1. 自由記述法により記載された具体的項目群と関連項目群のまとめ (カテゴリ) と例数

項目群まとめ	具体的項目	例数	(%)
安心の場所認識	家でテレビを見ているとき、テレビを家族と見る、家族でテレビを見てみんなで笑ったとき、テレビがある部屋、座椅子に座ってテレビを見ているとき、ホッと出来るとき、リラックス出来る、家でゆっくり休んでいるとき、他人の目を気にせず堂々と生活できる、安心して昼寝が出来る自分の部屋のベッド、自分のベッドで寝るとき、自分の布団で寝る、寝室、自分の部屋でベッドに転がっているとき、ベッドに横になりリラックスできる、安心して寝られる、風呂に入っているとき、お風呂、トイレの用足しを覚えたとき直ぐに出来るという居心地感、トイレの中、布団の中、布団にくるまっているとき、部屋が暖かくなっているとき、自宅での暖かさ(暖房)、布団、ベッド、寝る場所(布団)がある、布団がある、寝るとき、家に帰って自分のベッドに横になったとき、家での睡眠、寝るとき、安心して寝る場所がある、ゆっくりと睡眠することができる、安心できる、外面を気にしなくてもよい(気張らないでよい)、身の安全が保証されている、他人の目を気にせずともよい、家にいるととても落ち着くとき、対人関係において気を遣わないですむ家族がいる、人への気遣いがいいため、自分のペースで生活できるから、自分の家だから何をすることも自由、周りの目を気にしないですむから、毎日何気ないことを繰り返すことが出来る、同じ場所、同じ人、同じ物、帰るべき場所があることへの安堵感、家庭での居心地感が感じる場所は、朝、昼、夜などよくつかうリビングルームである、親や姉、弟から自分の名前をよく呼ばれる時や家族の一番の交流場所である楽しい会話などができてすごく幸せに感じて「自分の居場所はここなんだ」と一番感じる、何をしなくてもそこにいだけで安心できる、リビング等の寝転がれる空間の存在、布団の中、ベッドがある、ベッドで堂々と寝ているとき、あたたかいふとん、自分のベッドに入ったとき、寝具がある、ソファ、自分の臭いが染み付いた枕があるとき、自分専用のものがある自分のにおいを感じられるとき、畳のにおいを感じる時、自分で部屋の掃除や洗濯をする、自分のキッチンで料理が出来ること、落ち着くことが出来る、安心できる、家に親しみがある、親しみのある臭い、部屋の臭い、一番落ち着く場所、体を休められる、緊張が解かれる、安心する、安心感、家にいるときの安心感、不安や孤独を感じないこと、安心して眠れる、寝る場所があること、寝るとき、体を休める場所がある、疲れたとき休める、悩みを聞いてくれる人が居る、自分を認めてくれるかどうか、信頼できるかどうか、静かに休める、自分の持っている物が自分の好きなところに置いてある、自分の物がある、自分の好きな物があ	137	21.7
自分だけの部屋(個室)の認識	一人だけの空間がある(自分の部屋)、自分の部屋がある、自分の部屋で好きなことが出来る、ゆったりリラックスが出来る、自分だけの場所、赤の他人が入ってこない安心感、自分の部屋でボーッとしているとき、落ち着ける自分の部屋がある、ホッとする、安心感、リラックス、安心感と生活感、リラックスできる空間がある、自分の物がたくさんある、自分の想像していた場所に想像している物がある、自分の所有物がある、いつも寝る場所だから、寝室、人を気にしなくていい、プライバシーの確立、プライベートな時間を過ごしてきた場所、自分のペースで居られる時間が長い、家でやりたいことがある、他人に邪魔されないからリラックスできる、一人だけの時間を作れる、一人きりになれる、自分だけの空間を作ることが出来る、自室でゴロゴロしている、リラックスできる場所がある(自分の部屋)、自分の所有物が手近にある、自分の持ち物で周囲が構成されている、自分のしたいことが出来る、一人の時間があって楽しい、自分の勉強機でいろいろする、自分の机がある、自分の物が置いてある、自分の食器がある、集中することが出来る、集中して勉強が出来る、自分の部屋に鍵を掛けて入れた時、自室で趣味等をしているとき、自分の部屋で音楽を聴いているとき、趣味、自分の趣味をしているとき(AKB & SKE など)、PC前に座ったとき自分の好きなものに囲まれている、自分のものがある、パソコンを使っているとき(大学でも使えるが、自宅のものの方が規制などがない)ギターを弾いているとき、TVゲームをやっているとき、自分の好きなことに集中できる、自炊が出来る、自分の思っていること、実行したいと思っていることが出来る、自分の趣味を自由に出来る、打ち込める趣味がある、気を遣うことがない、素の自分になれる、ストレスが溜まらない、開放感、周りを気にせず自分の時間が出る、自分が自分らしくいられる、幸せを感じる瞬間、自分がこの場所で生きていると感じている	102	16.1
家族間交流(食事場面)	家族全員で食事をしているとき、家族でご飯を食べるとき、ご飯が出来たら呼んでくれる、母のご飯を食べるとき、ご飯が用意されている、遅く帰っても自分のメンが作ってある、自分の分のご飯が用意されているとき、食事をするとき自分の席がある、自分が帰るまで家族が食事を待っていてくれる、箸が用意されていてご飯が出てくる、親がいる部屋、自分の分のご飯が出てくるとき、家に夕食が用意されている、遅く帰ってきたのに食事が用意されていた時、家に帰るとご飯が用意されている時、食物が並んだテーブル、何か用意するとき(たとえばご飯とか)自分のぶんがちゃんと用意されている時、家族と食事をするとき、落ち着いて食事が出来る、食事が出来る、朝・昼・晩の自分の食事が用意されている時、家で食事しているとき、みんなで食事をしているとき家族との食事、みんなで朝食を食べているとき、家族と食事をすること一緒に過ごしているとき、ご飯と一緒に食べる、家族と同じ食卓で会話しながら食事した時、自分ひとりだけで食事することがない、自分の食事があ、お弁当や朝食が作られていること、めしがある、自分の分のご飯が作ってある、基本的に家族全員がそろって夕食を待っていてくれること、ご飯を食べるときに自分専用の椅子がある家族全員で外食に行く	91	14.4
家族との関わり(自分の位置がある)	実家に自分の席が残っているとき(下宿者)、家に帰ると家族がいた場所を少しずらずらして私が座るスペースを空けてくれる、家族同士での情報交換の時、家族で会話する、家族との交流、家族と話をしている自分の意見が通ったとき、家族が私がいなくて寂しいと言ってくれたとき(下宿者)、一緒に買い物などに出かける、家族で出かける、家族から自分へ依頼や感謝の気持ちを表してくれる、兄弟(家族)でゲームをするとき、写真とかいろいろ飾られている、家族が居るから、家族、愛する人がいる、こころの拠り所となる人(母親)がいる、家族との会話、家族との交流、家族とのコミュニケーション、楽しく話せる相手がいる、家族と関わること、家族が温かく迎えてくれる、暖かさ、家族の雰囲気がいい、心を許せる人(家族)がいる、一緒に楽しめる、帰宅したとき「おかえり」と言われた時	82	13.0

(表1 続き)

家庭内での役割が与えられている	<p>手伝いなどの役割があること、家での自分の役割(やるべきこと)が決まっている、自分が必要とされているとき、兄弟に勉強を教えたり、ゲームをしたりしているとき、弟の面倒を見ている時、手伝いを頼まれる、掃除など役割を決めて行動するとき、弟に勉強をきかされたり、親に手伝ってほしいといわれたり頼りにされる、自分が必要とされているとき(家族の役に立てるとき)家族がPCなどの操作がわからない時頼られる、家事や車の運転等頼りにされることがある、頼み事をされたり、頼んだりできる、話し相手として必要とされている時、自分が一番背が高く、物を都って欲しいと頼まれたとき、兄弟がいる中で自分に用事を頼まれる、親の通院に付き添うとき、いろいろな問題が生じた時に解決策を求められるとき、家事をしているとき、ゴミ捨てを任せられる、親に仕事を任せられたとき(買い物や掃除など)、頼み事をされたとき、期待された時、何かしら手伝ったとき、料理を作ってあげたとき、家事の手伝いをしているとき、重いものを運ぶときに頼りにされるとき、親や兄弟に心配や相談をされたとき、母の手伝いをする、家族の手伝い、家事の手伝い、親に手伝いを頼まれた、頼み事をされた、自分の役割があるとき、自分しかできない仕事がある、自分で作った料理を家族に食べてもらう、コタツにみんなで入ります、母親に愚痴を聞いてもらっているとき、困っているときに相談に乗ってくれる、妹に頼られる、家族にいつも心配してもらっている、心配される、両親がいつも居るといふ安心感、暴言を吐いてもなんだかんだでお弁当を作ってくれたりご飯を作ってくれる、自分のこと(家族に)怒られたり泣かれたりされたとき、家事の手伝いを求められたとき、必要とされているかどうか</p>	51	8.1
見慣れた場所、生育場所の認識	<p>普段見慣れた光景がある、見慣れた場所、見慣れた物がある、住み慣れた家へ帰る、住み慣れた場所という安心感、ずっという場所なので落ち着く、玄関、玄関(家に入って一番最初に入るから)、リビング、リビングで人が(家族)が集まっているとき、リビングでリラックスしているとき、リビングに自分の席がある、お茶の間、玄関、リビング、自分がそこで生活して汚してきた軌跡(慣れ)、自分が成長した場所だから、家の構成、環境、生まれたときからずっと同じ人(家族)と暮らしている、体が覚えている、広すぎず狭すぎず適度な広さ、住みやすい家か、いつも見慣れたソファでテレビを見ている時</p>	33	5.2
家族との日常的挨拶	<p>「おかえり」と言ってもらえるとき、家族にお帰りと言ってもらうとき、家族が温かく迎えてくれる、おばあちゃんに「おかえり」といわれたとき、「ただいま」と言って、「お帰り」と返事が返ってくる時、おはよう・行ってらっしゃいの挨拶、行ってらっしゃい・おかえりを言う家族が居る、挨拶される、朝1日の予定を聞かれる、私に変化があってもいつものように帰りを迎えてくれる、帰宅時に明かりがついている、私自身も含め全員が仲がよいと感じるとき、自分の話で笑ってくれたり楽しそうにしてくれたとき、帰ってきたときに「ただいま」といってたら応答があるとき、帰りが遅くて親から心配メールが来たとき、「お疲れ様」と声をかけられたとき(アルバイト帰りなど)、ただいま、おはよう、おやすみ、いつでも帰りますよと言ってもらえるとき、親が帰りを待っている、出かけるとき心配してくれる、「おはよう」や「行ってきます」「行ってらっしゃい」「ただいま」「おかえり」などの会話、あいさつ(おかえり、おはよう等)をされる、堅苦しくない崩れた挨拶をされた時</p>	30	4.7
家族の中の暮らし(家事=食事・洗濯等を家族がしてくれる)	<p>ご飯が作ってある、ご飯が家族分用意されている食事、夕食時に夕飯の用意がしてある、いつもと変わらぬ親のつくった夕食を食べるとき、飯がある、食事前の母がつけている料理のにおい、積極的な安心(何も言わなくてもご飯が用意されて一緒に食べたり)、一緒に食べる、ご飯を食べているとき家に帰ったら私の分のごはんが用意されている時、朝食・夕食、服が洗濯されている、洗濯物が洗って干してある、お風呂があいたら呼びに来てくれる、お風呂</p>	26	4.1
家族間交流(家族との会話)	<p>家族の誰かと会話しているとき、会話しているとき、家族の誰かに呼ばれたとき、家族で買い物に行くこと、家族が自分と話してくれるとき、家族と一緒に外食にでかける、家族と一緒に買い物にでかける、家族で出掛けたりするとき、弟と遊んでる時、家族とどこか外出するとき、食後、みんなにお茶をしているとき、一緒に食事をしたり、テレビをみる、家族みんなで一緒に番組をみているとき、一緒に出掛ける、基本的に家族と行動しているときは家庭において居心地感を感じる、気兼ねなく話せる、病気などで心配されたとき、助けもらったとき、テンションが低いと何かしらきいてくれる</p>	19	3.0
家族の中の暮らし(入浴場面)	<p>お風呂が焚いてある、風呂に入るとき、テレビの音、お風呂のにおい、シャワーの音、風呂、風呂に入っているとき、お風呂上がり、お風呂に入っている時、いつも風呂に一番に入るため、それをみんなわかってくれていること、トイレや風呂に入っている時</p>	10	1.6
家族との信頼関係(絆)	<p>家族との信頼関係が築けている、親が子を(子が親を)助ける、何かについて皆で話して決める、家族が心配したり声をかけてくれる、守ってくれる人がいる、自分のことを考えて怒ってくれる、一人ぼっちでない</p>	7	1.1
ペットがいる	<p>ペットが居る、ペットと遊んでいる時、犬がいること、ペットの犬が私の側から離れないとき、犬との戯れ、犬とたわむれている時</p>	9	1.4
その他	<p>自宅から下宿先へ帰ろうとするとき、実家に帰るバスのチケットを送ってくれたとき、家の敷居をまたいた瞬間、家族から電話がある時、また話している時、家族から定期的に連絡がある</p>	5	0.8

所) 認識というものである。そこが新しかろうが古かろうが、整頓されていようがいまいが、わが家はわが家である。そこはまさにこころ開けることができる安心の場所である。

「家族との日常的挨拶」は内容的には「家族間交流」に含めてよいであろう。言葉で交わす家族間の繋がりといっておくであろう。ただ、食事の行為を介在させた家族間交流とはとりあえず区別することにした。日常的挨拶の言葉、“おはよう”“行ってきます”“ただいま”“お帰り”の声の掛け合いは会話者同士の相手を思いやる掛け声でもある。密接な人間関係を思わせるものである。

「ペットがいる」も、家族の一員化したイヌやネコがかわいい仕草でじゃれてくる様子が窺え、それらのペットとの交流を通じた家族間交流といえるであろう。ペットも飼育者である家族の一員としての学生(回答者)を認知しているということでもある。

「その他」としてまとめた項目は、特定の分類カテゴリに分類しにくいものの、いわば家族との関わりを示す日常的エピソードと考えてよいであろう。また、各 1 例のみの項目が 30 項目ほどあったが、ここでは分類不能として検討項目群からは除外した。

4. 考察

自分の家であるから、そこでの日常生活において居場所感がないなどとは考えにくいと普通は思うであろう。しかし、学生にとって、家庭は、基本的に両親や兄弟と共同居住する空間である。そこでの人間関係がうまくいっていないければ、食事だ、お茶だ、お風呂だと言われても疎外されたような本人の家族や家庭感は拭いきれないであろう。家庭からも外れると人には最後の逃げ場所もなくなる。昨今の学生相談のケースにおいて、面談を重ねるにつれて親子間の、家族間の感情のしがらみを吐露する来談者(学生)が少なからずいることに驚かされる。家庭における居場所感を探究するテーマはこのような相談所見から出発したものである。自由記述法を用いることにより、制約の少ない条件下で回答者の内面的な発言を収集しなかったからである。総数で 632 項目の回答を得た。これらを便宜的に名称を付けたカテゴリに分類して検討を行った。

全カテゴリおよびそれらに含まれる項目群を通読すると、「家での居場所」も結局は家族というヒトとの関わりから捉えることが示唆される。換言すれば、家屋という物理的な建物との関わりよりも、その建物の中で日常的に繰り広げられる両親・兄弟姉妹との人間模様に規定されるということが明白となった。われわれが行った先

の大学における居場所感での調査において、大学の建物・施設・設備という物理的な存在(モノ)との関わりよりも、ヒト、特に友人関係を中心とした人間的関わりの中で居場所感が形成されるということが示唆されたが、そこでは入学後に形成される新たな人間関係・友人関係が中心であり、そのために先ず知人を増やす、多くの人と知り合う機会・会合を多く持つことが重要だと指摘した。一方の家庭においては、少なくとも子どもたち(学生たち)にとっては生まれたときからの人間関係から出発している。そこでは家族間の“思いやり”を想定させる良好な人間関係の維持が子どもの立場からは重要なことになる。回答項目群を見ると、とりわけ両親との関わりを示す項目が多く記載されていることから、両親が自分(学生)をどう見ているかということが、居場所感の規定因としては、兄弟・姉妹との関わり以上に重要なことと考えているようである。高校生の頃までの全生活の出発基地としての家(家庭)も、大学生という大人の始まりともなれば、それまでの生活とは異なり、活動の基盤を家庭外(例えば大学)に置くことになる。生活基盤が家庭外に移れば価値観の準拠軸も家庭や家から離れることになる。こうして他人との関わりの中で活動することが増えてくれば、一方で家庭(家族)との分離不安が募っても不思議ではないであろう。特に、下宿でもしてたまに帰宅(帰郷)するような状況になれば、本人(回答者)が居ない状況で作られた新たに営まれた家庭の中に入るわけで、多少の違和感を覚えても(居場所感の乏しさを感じても)不思議ではないであろう。違和感の解消にはその状況に早く慣れることである。馴化するには、家族の一員として為すべき役割が与えられていることである。家族からの役割期待と、本人の役割自覚が一致すれば疎外感を生じにくいであろう。家族としての活動に参加することで、家庭の中に自分の場所を見つけることができる。先の大学生活においても、また本論文の家庭生活においても、居場所感の形成や獲得にヒトの要因が重要であることが確認された。そうした人の集まりの中で自分が果たす役割の自覚と周囲からの果たして欲しい役割の期待が一致することは、居場所感の形成や獲得に重要な規定因になると思われる。そういう意味で学生たちの自覚的役割の認知をサポートすることが自分の居場所感を見失いかけた学生支援の観点から重要であると思われる。

5. 結論

自由記述法を通して得られた先に報告した「大学」と本報告での「家庭」での居場所感については、“モノ”的な建物や施設・設備よりも、基本はヒトとの交流の産

物であることが窺われた。これは、「大学」も「家庭」も共通の傾向であった。加えて、「大学」および「家庭」においても、居場所があるということは自分の存在が周りから認められるとともに、そのような自己認識があることである。だからこそ、そこが自分らしく居られる場所だと認識されるのである。また、居場所感は、自分がその場所に相応しい活動に集中できているか否かにも規定されるようである。回答された記述内容から見て、そのような傾向は特に「家庭」において強いようであった。家庭における交流は、本研究で見られたような食事場面であったり、日常的会話や挨拶であったり、入浴や居間での寛ぎであったり等の、ごく日常的行為の中での人と人との（家族の成員同士の）関わりから生まれる。家では自然にできる交流も、他人との関係、特に知らない相手との間では緊張をはらむことになる。しかし、そうした経験の積み重ねによって、見知らぬ相手ともごく自然な交流を育む術を得ることになる。

居場所感形成において、他者が介入できる要素としては「役割の付与」を挙げることができる。「大学」生活においては、周りから指示される役割が多く、指示されないことで不要感を募らせることが多い。「家庭」生活においては、自然発生的な役割期待が強く、しかもその期待は生育過程の中で既にできあがっていることが多い。大学でも家庭でも役割期待に応えられなければ当人には苦痛になる。不要な人の存在はないはずで、役割の期待と自覚との再調整が支援の指針の一つとなろう。

6. 文献

- 1) 飯田沙依亜・甲村和三・舟橋 厚・長谷川桜子・竹澤大史・幡垣加恵 大学生の居場所に関する研究—居場所のなさに着目して— 愛知工業大学研究報告 46, 49-55. (2011)
- 2) 石本雄真 居場所感に関連する大学生の生活の一場面 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要 2 (No. 1), 1-6. (2008)
- 3) 甲村和三・飯田沙依亜 大学生生活において居心地の良さを感じる要因—大学生を対象とした自由記述法を用いて— 愛知工業大学研究報告 47, 133-137. (2012)
- 4) 桑原民子・社浦竜太 大学生における居場所感と大学生活不安に関する研究—学生相談室の利用の有無に着目して— ものつくり大学紀要 第2号, 60-65. (2011)
- 5) 杉本希映・庄司一子 中学生の「居場所環境」と学校適応との関連に関する研究 学校心理学研究 6 (No. 1), 31-39. (2006)
- 6) 斎藤富由紀 2007 大学生および高校生における心理的居場所感尺度作成の試み 千里金襴大学紀要 73-84. (2007)

(受理 平成 25 年 3 月 19 日)